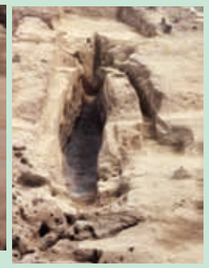
こまつ 原始・古代の ものづくり

こまつにワザあり

小松には、九谷焼、小松綸子、小松イ草、小松瓦、銅器鋳造など、日本を代表する数多くの伝統工芸があります。また、遊泉寺銅山や尾小屋鉱山の鉱物、滝ケ原産の石材など地下資源を生かした産業の発展をみることができます。

ものづくりの歴史。それは、人類史を語る上で非常に重要な手がかりです。ここ小松には、現代の伝統工芸や産業のルーツとなる高度なものづくりの歴史があります。森の恵みや地下資源といった、素材の特質を活かして作られる生活必需品だけでなく、地域特産の交易品、さらにヤマト王権を統べる大王への献上品や、広域にわたり供給された大量生産品に発展したものまでありました。そうしたものづくりの裏に隠された原始古代のワザの数々をたどります。

南加賀製陶・製鉄遺跡群



蓮代寺町、木場町、林町、戸津町、二ツ梨町、那谷町など丘陵地を中心とした製陶・製鉄遺跡群。製陶（須恵器生産）は古墳時代後期（6世紀代）から、製鉄は遅くとも奈良時代（8世紀代）には操業が始まった。須恵器窯およそ300基のほか、砂鉄製錬を行う炉、燃料用の木炭窯が見つかっており、古代の一大コンビナートといえる。

八日市地方遺跡

現在の八日市町地方、日の出町、こまつの杜にまたがる、今から約2,300年前の弥生時代中期の大規模集落遺跡。大陸の稲作文化が列島内各地に定着する中で誕生し、玉つくり・紡織・木工など、高度なものづくり技術が発展した。平成5年から大規模な発掘調査が行われ、平成23年6月に出土品1,020点が一括で国の重要文化財に指定された。

額見町遺跡

飛鳥時代（7世紀初頭）から平安時代まで連綿と続く月津台地上に広がる古代集落遺跡で、丘陵地の製陶・製鉄遺跡群で生産を担った工人のムラの1つ。さらに、朝鮮半島由来のオンドル状遺構（L字形カマド）や朝鮮半島系の土器が出土していることから、最先端のものづくり技術をもたらした渡来人のムラとも考えられている。

本書では、原始古代合わせて5つのものづくりを紹介します。その舞台の中心となるのは、原始では弥生時代の大規模集落八日市地方遺跡、古代では窯や製鉄炉が密集する小松市南東部の丘陵地を中心とした南加賀製陶・製鉄遺跡群と、その担い手となった古代工人のムラ、月津台地上の遺跡群です。

いざ！ものづくりの舞台へ

・このページのイラストマップはイメージです。
・各ページの掲載写真の中で、他機関から提供いただいたものについては★印を、他機関の所蔵品については■印を付記し、本書末尾に詳細な出典を記載しました。
・重要文化財には●印、市指定文化財には○印が付記してあります。

こまつ原始の

玉つくり

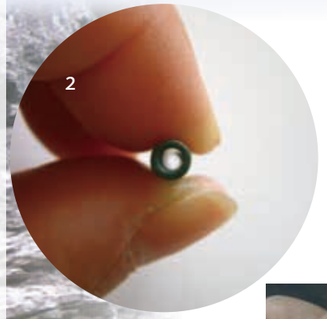
making stone accesory

全国屈指のこまつ流管玉づくり

玉とは、色とりどりの石材を割り、磨き上げてつくる装飾品です。弥生時代の八日市地方遺跡では、美しい緑色の碧玉石材を加工した管玉の生産が盛んに行われました。出土した碧玉の総重量はなんと 500kg ！つくられる管玉は主に直径２mm の円筒形をしたミクロサイズなので、相当な量をつくっていたことがわかります。これ程の出土量はとても珍しく、全国屈指の管玉生産遺跡として知られています。

このような生産力を生み出した要因は、石材の入手にあります。良質な碧玉がとれる地点は全国に４ヶ所しかなく、その１つが小松市菩提町・滝ヶ原町周辺に存在するのです。日本海グリーンタフ（緑色凝灰岩）地帯とよばれる活発な火山活動によってできたその岩盤からは、碧玉以外にも穴あけ用の石針に必須のメノウという硬質な石材も産出するため、地元の資源を最大限に生かすことができたことでしょう。

1


2

3

4

1：●八日市地方遺跡出土の管玉製作工程品、２：管玉のサイズ　針に糸を通すような仕事ぶり、３：●八日市地方遺跡出土の勾玉　勾玉は新潟県糸魚川産のヒスイでつくられる、４：勾玉と管玉の組み合わせ　首飾りや頭飾りとして用いられた

小松産碧玉の原石

碧玉の原産地　碧玉を産出するグリーンタフ地帯は日本海沿岸に分布するが、特に良質な石材が採取できるのは小松を含めて計４ヶ所。小松産の碧玉は近年、北海道から九州にまで最も多く、そして広い分布を示す産地不明の碧玉（女代南B群）である可能性を持ち始めたことで、注目を浴びている。

5

6

7

小松産の可能性がある碧玉石材　５：鳥取県青谷上寺地遺跡出土品（★1）　６：京都府日吉ヶ丘遺跡出土品（★2）　７：島根県森遺跡出土品（★3）

古墳時代、新たなブランド戦略

八日市地方遺跡の集落が終焉を迎え、ヤマト王権が列島を支配する古墳時代になると、緑色の石材でつくられた腕輪などの宝飾品が王を魅了するようになり、小松の石材が再び脚光を浴び、高いシェアを占めるようになります。

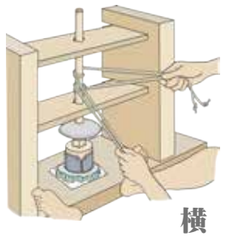
8

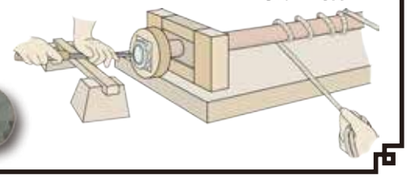
9

８：加賀市片山津玉造遺跡出土の石製の腕輪（■1）
９：奈良県島の山古墳に副葬される小松産石材を利用した石製の腕輪（★4）

コラム　石材を刳りぬく

石材を刳りぬいて腕輪をつくる方法にはさまざまな説があります。その中で有力なのは、ロクロ回転の原理を使った穴あけ方法です。軸の方向によって縦軸と横軸の２種類があり、石の加工のほかに土器や木器にもその痕跡が認められます。果たして当時ロクロは存在したのか、現在も議論は続いています。





刳りぬきの再現と痕跡
10：漆町遺跡群（金屋サンバンワリ地区）出土の刳りぬき円盤と石製腕輪片（■2）
11：横軸ロクロによる再現品（■3）

10

11

こまつ原始の木工
woodwork

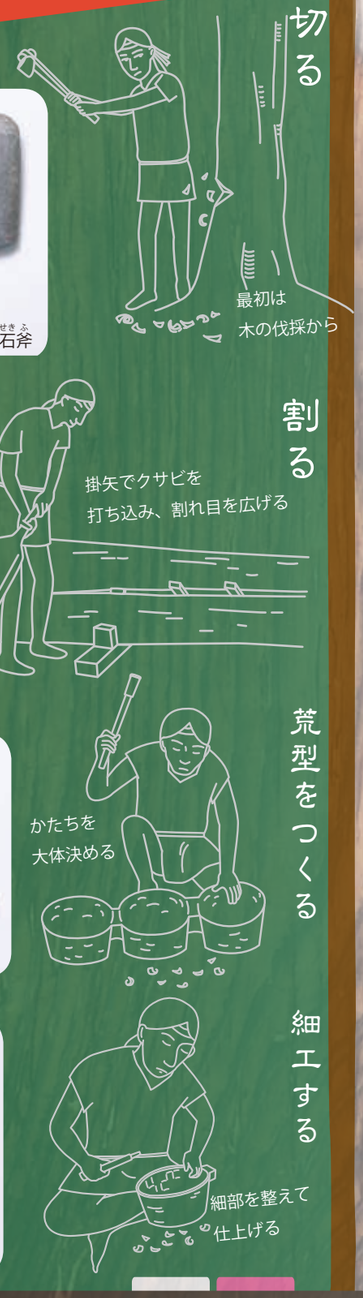
木の加工方法と道具

●太型蛤刃石斧

●掛矢

●柱状片刃石斧

●小型片刃石斧



洗練された木工技術

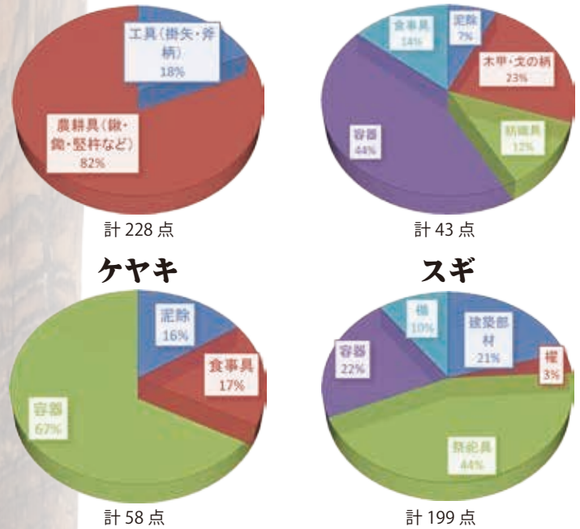
1：●八日市地方遺跡出土の木製容器と木製食事具　加工途中の未成品も含まれている。

木を見抜き、選ぶ

八日市地方遺跡から出土した木製品の豊富な樹種利用を観察すると、人々が木の性質をよく理解して加工していたことがわかります。丈夫で磨耗の少ないカシは鍬や鋤、斧の柄などの農工具に、硬く木目の美しいクワやケヤキは容器に、軟らかく加工のしやすいスギは祭りの道具や指物（組み立て品）に使う板材に、弾力がありよくしなるイヌガヤは弓や匙にというように、素材選びへのこだわりが感じとれます。クワは容器以外にも特別な道具に使われる傾向があるようです。

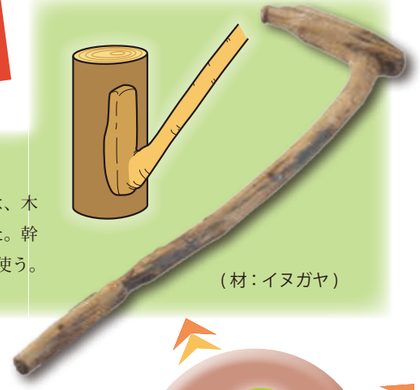
樹種の使い分けを数字で見ると…

（八日市地方遺跡出土品数よりグラフ化）



●すべて八日市地方遺跡出土品

木をムダなく使う！


（材：イヌガヤ）

【膝柄（横斧用）】

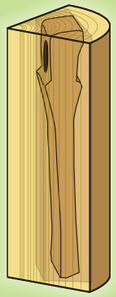
横斧（柱状片刃石斧）用の膝柄には、木の幹と枝が分かれる部分が用いられた。幹に斧の刃を取り付けて枝を柄として使う。

【匙】　膝柄と同じく幹と枝の角度を利用して用いる。

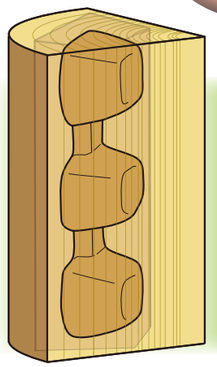
（材：イヌガヤ）

【直柄（縦斧用）】

縦斧（太型蛤刃石斧）用の直柄には、柾目のミカン割り材を縦木取りし、丈夫な部分を用いる。



（材：アカガシ亜属）



【容器類】

径の大きな柾目の半割材やミカン割材を横木取りし、連結させた荒型を切り出す（写真２参照）。

【直柄平鍬】

柾目の板材から、容器類同様、連結させた形を切り出す。実際に３連の鍬未成品が出土している（写真３参照）。

（材：アカガシ亜属）

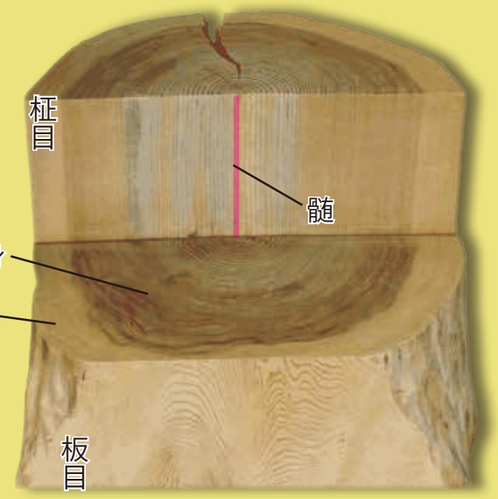
工夫を凝らした木取り

「木取り」は木の部位や向きを考えて製材や加工を行うことです。例えば耐久性が必要な容器や農具には、腐りやすい白太や割れの原因となる髄を取り除いた柾目材がよく使われます。材を効率良く使うために連ねてつくるものもあり、ものづくりのセンスが窺われます。

2

3

2：●八日市地方遺跡出土の木製容器未成品（材:ケヤキ）
3：●八日市地方遺跡出土の鍬未成品（材:アカガシ亜属）



年輪の外側を白太、内側を赤身、中心軸を髄と呼ぶ。また丸太の中心に向かって切ると年輪が平行な木目（柾目）が、丸太の中心からずれて切ると山形の木目（板目）が現れる。柾目材の方が反りや収縮などの狂いが少ないことが特徴。

樫（カシ）

桑（クワ）

欅（ケヤキ）

杉（スギ）

●すべて八日市地方遺跡出土品

コラム　クワにまつわる想い

弥生時代に作られた精製容器は、クワの木が利用されています。他にも紡織具（次ページ）など、出土量が極めて少ない特別な道具に用いられます。クワは絹の原料となる蚕が餌とする木で、養蚕業に欠かせない木でもあります。また、弥生時代と並行する中国（周の時代）にはクワを神木とする思想があることから、クワの利用にはその性質だけでなく、養蚕や人々の信仰も深く関わっていたのかもしれません。

4

4：●八日市地方遺跡出土のジョッキ形容器（材：ヤマグワ）

こまつ原始の

紡織

spinning and weaving

糸を「紡」いで布を「織る」

機織りは弥生時代に伝来した新技術で、アカソ・カラムシなどイラクサ科植物や麻の繊維を紡いで糸をつくり、整経（経糸を整える作業）を行った後、織りの工程に入ります。八日市地方遺跡出土の機織り具は織った布が輪状になり、織り手の身体によって布長や布幅が規制されるものでした。この織り方は繊維の方向が一定となるため、毛羽立ちや切れが少なく、特に植物性繊維に適した技術であると言われています。

2

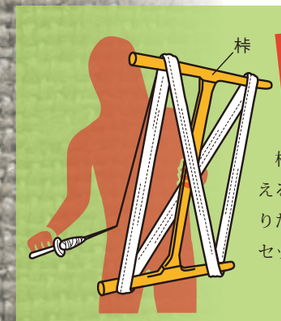
3

1：●八日市地方遺跡出土の機織り具（材：ヤマグワ）上から桙、緯打具、布送具、2：八里尚山A遺跡出土の布を当てた痕跡のある土器、3：さまざまな編組技術　縄文時代伝統の技術で、経材と緯材を組み合わせる点では、織りの原理に似ている

① 糸づくり

紡錘車を膝の上で転がし、繊維に撚りをかけながら糸を紡ぐ。紡錘車の一部である弥生時代のはずみ車は土器片をリサイクルして使われた。八日市地方遺跡からは実に 300 個以上が発見されている。

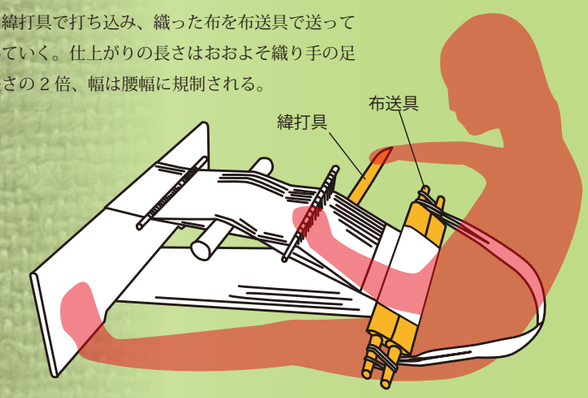
② 経糸を整える



桙を使って経糸を一定の長さに整える。この作業を行うことで、つくりたい布の長さを調節し、織り機にセッティングすることができる。

③ 機織りスタート！

足の屈伸と腹筋運動によって経糸を上下させ、緯糸を緯打具で打ち込み、織った布を布送具で送って進めていく。仕上がりの長さはおおよそ織り手の足の長さの 2 倍、幅は腰幅に規制される。



こまつ古代の

製陶

pottery manufacture

八里向山Ｆ７号墳出土の初期須恵器（５世紀）　小松で須恵器生産が始まる前に陶邑から運ばれ、副葬された。

須恵器生産のはじまり

古墳時代、列島全体が国家としてのまとまりを見せ始める頃、大陸から伝わった窯で焼く新しいやきもの、須恵器の国産化が始まります。ヤマト王権の本拠地である畿内の陶邑窯跡群（大阪府）が中心となって全国各地へ製品や技術を供給し、徐々に地方での生産を定着させていきました。

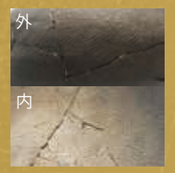
このような動きの中、小松では北陸最大規模となる古代のやきもの生産地、南加賀製陶遺跡群が展開します。主に小松市南東部の丘陵地に多数の窯が築かれ、食膳具や貯蔵具などの容器の他に、瓦や硯、塔の頂部を飾る水煙などの相輪部品までもがやきものでつくられました。つくり方も様々で、製品の形や大きさによって技法を変えながら豊富な器種を生み出しました。

須恵器の成形技法

水挽き成形

ロクロ（回転台）にのせて、粘土を伸ばしていく方法。表面には指でなでた跡が残る。

叩き成形



叩き締めて形を整える方法で、特に大型品によく使われる。表面には叩く際の当て具の跡が残る。

風船技法

口を塞いで内部を中空の風船状態にし、空気圧を利用して変形させる方法。円盤を貼り付けるものと、回転運動によって口を絞る方法がある。

古墳時代後期 6世紀

二ツ梨東山窯跡出土品

戸津六字ヶ丘窯跡出土品

飛鳥時代 7世紀

林タカヤマ窯跡出土品

奈良時代 8世紀

二ツ梨横川窯跡出土品

平安時代 9世紀

戸津窯跡群出土品

瓦

硯

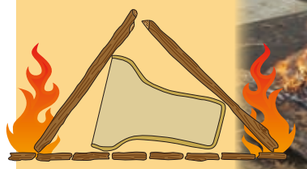
○陶製水煙

やきものづくりの源流

須恵器生産が始まる以前には、長いやきものづくりの歴史があります。時代によって形や文様が変化し、縄文土器・弥生土器・土師器と呼び分けられています。焼き方はすべて野焼きに近いものですが、弥生土器に用いられる燃焼効率の良い覆い焼きの登場は１つの画期と言えます。これは米作りとともに大陸から伝来した技術とされ、縄文土器と弥生土器の大きな違いです。また、土師器は古墳時代～古代につくられる素焼きの土器で、食膳具や煮炊き具など様々な用途を持ち、須恵器の食膳具や鉄製煮炊き具の登場で姿を消しつつも、祭器（いわゆる”かわらけ”）として中世以降も用いられます。

土器焼きの移り変わり

縄文土器の焼き方 ～開放焼き～



縄文土器の焼き方は開放焼きと呼ばれ、薪を並べた上に土器をのせ、さらにその上に薪をくべて火をつけるもの。熱が外に逃げやすく、大量の燃料を必要とする。

念仏林遺跡出土の縄文土器

弥生土器の焼き方　～覆い焼き～

泥と藁で覆った中で焼く弥生土器の覆い焼き。熱を閉じ込めるため、燃料を節約できる。土器に泥と藁が接触することで、大きな黒斑ができることがある。

八日市地方遺跡出土の弥生土器（小松式土器）

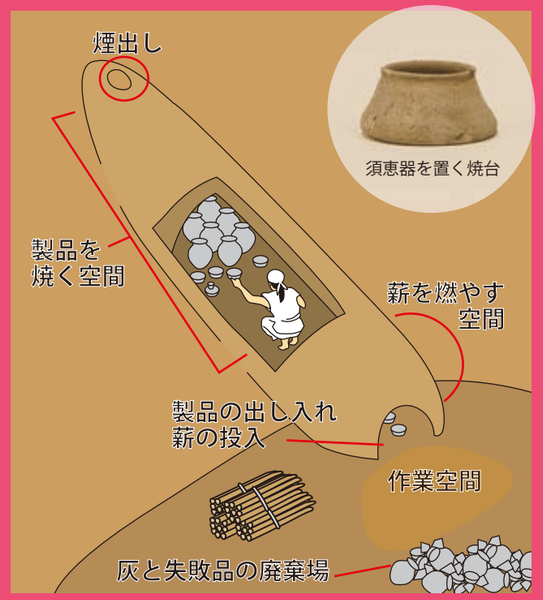
土師器の焼き方 ～焼成坑の構築～

初期の土師器は弥生土器に似るが、飛鳥時代以降、穴（焼成坑）を掘って覆い焼きする技術が導入される。奈良時代になると、須恵器と一体的な生産が行われることで、窯で焼かれることもある。

焼成坑

額見町遺跡出土の土師器（飛鳥時代の鍋と釜）

須恵器の焼き方　～窯焼き～



窯という密閉空間をつくることで高温を出すことに成功し、一度に大量の土器を焼くことができるようになった。転倒防止用の焼台など窯道具を多用する。

戸津窯跡群で見つかった８～10世紀の窯跡群

こまつ古代の

製鉄

iron manufacture

金属器へのあこがれ

銅や鉄などの金属との出会いは、石の道具を使い続けていた人々にとって画期的なできごとだったことでしょう。硬く丈夫で切れ味鋭い金属を人々はこぞって求めました。

銅は鉄よりも加工がしやすく、弥生時代にはすでに鋳造技術が発達していました。それに比べて鉄の加工には高度な技術が必要で、弥生時代にようやく限られた地域で鋼精錬や鍛造が始まります。古墳時代になると、列島独自の技術が磨かれ、王による鉄製武器をはじめとした一元的な管理が行われます。そして、古代をむかえる頃には鉄素材をつくる製錬技術が発達し、全国に広まっていきます。

1

2

鉄斧をソケット状に差し込んで使う着脱式の柄！

1：●八日市地方遺跡出土の武器形木製品
銅製武器を模したもので、木目や縞模様で金属の輝きや研ぎ分けを表現している。
2：●八日市地方遺跡出土の鋳造鉄斧の柄
3：八日市地方遺跡出土の柄付き鉄製 鉈 （★5）
高い木工技術は、全国でもいち早く導入された鉄製の工具によって支えられていたと考えられる。

3

4

5

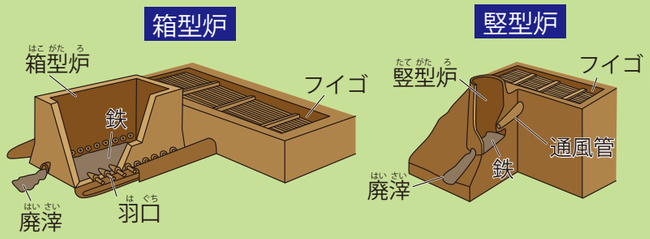
4：一針 B 遺跡の金属器生産工房跡（★6） 鉄の鍛造や銅鏃の鋳造が行われていた建物跡。北陸では最古の事例。
5：一針 B 遺跡出土の銅鏃鋳型（■4）
銅を溶かして型に鋳込む技術は、小松では弥生時代後期から用いられていた。左上の容器は金属を溶かし込む際に使ったと思われる取り瓶。

6：八里向山F７号墳出土の鉄製品
武具(甲、剣、刀、鏃)や農具(鍬・鋤先、鎌)、工具(鑿、やりがんな、斧)など豊富な製品が、王から地域の首長に下賜され副葬された。

6

製鉄炉の登場

古代北陸の鉄は、砂鉄製錬という、木炭の燃焼によって砂鉄を還元させる方法でつくられるのが一般的でした。燃焼させる炉は、大きく箱型炉と竪型炉に分かれ、北陸では初め箱型炉の技術が導入され、平安時代前期（９世紀中頃）に竪型炉に転換したと考えられています。できた鉄は集落へと運ばれ、さらに鍛えられて製品化されます。製鉄炉近くからも鍛冶炉や鋳型が出土しているため、一部の加工は炉の周辺で行っていたようです。



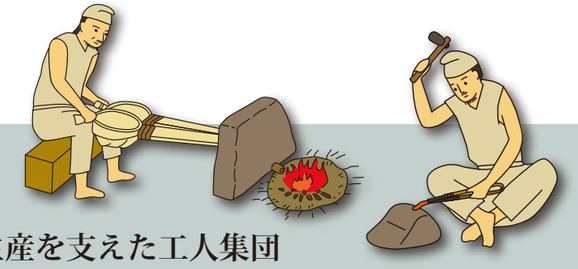
箱型炉は浴槽のような形に粘土を積んだ炉で、竪型炉は円筒形の穴を掘って煙突形に粘土を積む。どちらも側面や背後にフイゴと呼ばれる送風機が付いており、炉内の温度を上げる役割をを果たす。炉の裾には、不純物を多く含んだ滓を流し出す穴があけられている。

7

9

8

7：林製鉄遺跡の１号箱型炉
周囲からは、排水のための溝と２基の鍛冶炉、覆い屋と思われる柱穴が見つかっている。
8：林製鉄遺跡の２号竪型炉
見つかった羽釜鋳型は正置されていた。鋳込むには底から鉄を流し込むため、水溜めなど別の使い方も考えられる。
9：２号竪型炉周辺から出土した大鉄塊（★7）



生産を支えた工人集団

製鉄を担った工人集団は、月津台地上に集落を構えます。その中でも最大規模の額見町遺跡は、７世紀の飛鳥時代から 12 世紀の平安時代末期というほぼ古代の全時期に渡って人々が住み続けた場所です。建物内外からは鉄を加工した鍛冶炉や鍛冶の道具など鉄づくりの痕跡が数多く見つかっています。その他土器を焼くための焼成坑や窯道具も発見されたことから、製陶に携わった工人も暮らしていたことが分かります。

10

12

11

10：額見町遺跡の鍛冶炉付き建物跡
11：額見町遺跡出土の鉄製品（鍛造）
12：額見町遺跡出土の鍛冶関連品

地図で見る 南加賀製陶・製鉄遺跡群

8 戸津窯跡群・戸津六字ヶ丘窯跡

戸津 31 号窯（9 世紀）

六字ヶ丘 4 号窯（7 世紀後半）

煙出し口

7 林タカヤマ窯跡

1 号窯（7 世紀前半）

排煙を調節する溝

作業用階段

9 二ツ梨豆岡向山窯跡

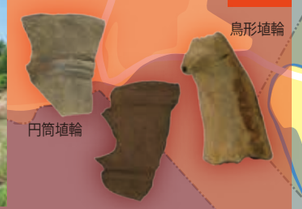
7 号窯（10 世紀前半）

須恵器をのせる段

焼台

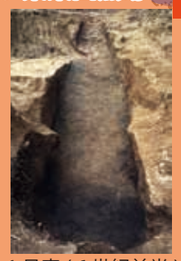
10 二ツ梨殿様池窯跡

窯跡現況



窯で焼かれた埴輪

11 二ツ梨東山窯跡


1 号窯（6 世紀前半）

12 矢田野向山窯跡

1 号窯（8 世紀前半）

排水溝

1 蓮代寺ガッショウタン遺跡★8

7 世紀後半～8 世紀初頭　木炭窯 3 基

2 蓮代寺ムコンヤマ遺跡★9

12 世紀　竪型炉 1 基＋木炭窯 3 基

3 木場遺跡Ｈ地区

8 世紀後半～9 世紀　竪型炉 1 基＋木炭窯 2 基

4 木場遺跡Ａ地区

平安時代　木炭窯 2 基

5 木場遺跡Ｂ地区

9～10 世紀　竪型炉 2 基＋木炭窯 2 基

6 林製鉄遺跡群

Ａ区 8 世紀中頃　箱型炉 1 基＋木炭窯 1 基

Ｂ区 9 世紀末～12 世紀前半　竪型炉 1 基＋木炭窯 1 基

Ｃ区 9 世紀中頃　木炭窯 2 基

小松市南東部から加賀市北東部に広がる丘陵地は古代のやきものと鉄の一大生産地で、南加賀製陶・製鉄遺跡群と呼ばれています。古代のやきもの、須恵器を焼く窯は古墳時代後期（6 世紀）から平安時代中期（10 世紀頃）まで約 300 基近くが築かれ、その後、壺・甕・鉢を中心とした加賀焼の生産が始まります。製鉄遺跡は 7 世紀後半～8 世紀初頭の木炭窯に始まり、平安時代末（12 世紀前半）に至るまでの砂鉄製錬や鋳造の痕跡が見つかっています。これら 2 つの手工業生産地が折り重なるようにして丘陵地一帯が一大コンビナートとして栄えました。

こまつに息づくものづくりの系譜

●は重要文化財、○は市指定文化財
写真の詳細解説は次ページ

旧石器
縄文
弥生
古墳
（飛鳥・奈良・平安）古代
中世
近世
近現代

石材加工

旧石器時代のナイフ形石器

縄文時代の石鏃

原始ものづくり

玉つくり

碧玉製の管玉

古墳石室

石製腕輪

○石造多層塔

○石垣

石切り場

○アーチ石橋

石倉

木と人とのかかわり

斧柄

弓矢

丸木舟

木工

農具・工具・容器類

舟材を転用した井戸枠

花弁高杯

中世の木工

下駄

箸

漆椀

曲物

○那谷寺の木造建築

小松城二階御亭入口扉

○曳山の彫刻

撚る・織る・編む・組む

糸づくり

縄目の文様

土製紡錘車

鉄製紡錘車

糸撚り車

織りの技術

紡織

原始機

地機

高機

加賀絹

近代の地機

小松綸子

小松イ草

越後編布

編組の技術

編布

カゴ編み

こつら細工

やきものづくり

素焼きの土器

縄文土器

弥生土器

古墳時代の土師器

奈良時代の土師器

瓦

かわらけ

いぶし瓦

●人物埴輪

（埴輪）

窯焼きの土器

製陶

須恵器生産

（三彩・緑釉）（灰釉）

○加賀焼

（焼締）

（施釉）

○平卓（再興九谷）

○連房式登窯

（青磁・白磁・染付・色絵）

ジャパンクタニ

小松瓦

鉱物資源の利用

鉄の利用と金属加工の始まり

柄付き鉄製鉈

銅鏃の鋳型

古墳に副葬された鉄器

鉄づくりの発展

鍛冶加工

製鉄

古代ものづくり

製鉄炉の登場

中世の鍛冶生産跡

鋳物師の活躍

鋳造香炉

鉱山の開発

金平鉱山
尾小屋鉱山
遊泉寺銅山

昭和初期の尾小屋鉱山

[写真提供先]

★１鳥取県埋蔵文化財センター提供、★２与謝野町教育委員会提供、★３島根県古代文化センター提供

★４奈良県立橿原考古学研究所提供、★５～９石川県埋蔵文化財センター提供 (★７は表紙にも使用)

[資料所蔵先]

■１小松市立博物館所蔵、■２・４石川県埋蔵文化財センター所蔵、■３三宅博士氏所蔵 (製作)

[その他出典]

樫・桑・欅・杉の木材標本 (材鑑像)…独立行政法人森林総合研究所　日本産木材データベース http://f030091.ffpri.affrc.go.jp/JWDB/home.php よりダウンロード、紡織工程イラスト…東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房 121 頁掲載図を再トレース、風船技法模式図…北野博司 2001「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第９号 160 頁掲載図を再トレース、開放焼き・覆い焼き模式図…安城市歴史博物館編 1999 企画展図録『弥生の技術革新　野焼きから覆い焼きへ』８頁および 10 頁掲載図を参考、窯焼きイラスト…菱田哲郎 1996『歴史発掘 10　須恵器の系譜』講談社 93 頁掲載図を参考、箱型炉・竪型炉復元図…文化庁文化財部記念物課編 2013『発掘調査のてびき－各種遺跡調査編－』259 頁および 260 頁掲載図を再トレース、鍛造鍛冶再現イラスト…鬼頭清明 1985『古代の村　古代の日本を発掘する６』岩波書店 69 頁掲載図を参考

系譜図写真解説 (既出の資料を除く)

[石材加工] 旧石器時代のナイフ形石器／八里向山遺跡群出土、縄文時代の石鏃／念仏林遺跡出土、古墳石室／河田山 12 号墳 (史跡公園に移築復元)、○石造多層塔／滝ヶ原町八幡神社、○石垣／小松城本丸櫓台、○アーチ石橋／滝ヶ原町に５橋現存・写真は「がやま橋」、石倉／ジャパン九谷の里 松雲堂、石切り場／滝ヶ原町

[木と人とのかかわり] 花弁高杯／漆町遺跡群 (白江ネンブツドウ地区) 出土、舟材を転用した井戸枠／松梨遺跡出土、中世の木工／箸：長田南遺跡出土・下駄：荒木田遺跡出土・漆椀：銭畑遺跡出土・曲物：千代オオキダ遺跡出土、○那谷寺の木造建築／那谷町・山上善右衛門 作・写真は「三重塔」、小松城二階御亭入口扉／小松市立博物館所蔵、○曳山の彫刻／京町曳山・村上九郎作鉄堂 作「彫刻鳳凰・龍虎図欄間」(全８枚のうち２枚)

[撚る・織る・編む・組む] 縄目の文様／念仏林遺跡出土縄文土器、鉄製紡錘車／額見町遺跡出土、糸撚り車／近代の地機／小松綸子／すべて小松市立博物館所蔵

[やきものづくり] 古墳時代の土師器／念仏林南遺跡出土、奈良時代の土師器／南加賀製陶遺跡群 (二ツ梨豆岡向山窯跡) 出土、かわらけ／御館遺跡出土、いぶし瓦／小松城跡出土・小松市立博物館所蔵、小松瓦／大文字町本光寺鐘楼門の鬼瓦、●人物埴輪／矢田野エジリ古墳出土、○加賀焼／市内遺跡出土・小松市立博物館所蔵、○平卓 (再興九谷) ／小松市立博物館所蔵・粟生屋源右衛門 作「竹林七賢人文木瓜形平卓」、○連房式登窯／小松市立登窯展示館、ジャパンクタニ／小松市立博物館所蔵・写真左は九谷庄三 作「色絵桜 幔 幕双鶏図大鉢」・写真右は松本佐瓶 作「瑞花鳥図大花瓶」

[鉱物資源の利用] 中世の鍛冶生産跡／幸町遺跡、鋳造香炉／小松市立博物館所蔵・秋山喜平 作「柴牛香炉」、昭和初期の尾小屋鉱山／尾小屋町

[参考文献]

潮見浩 1988『図解 技術の考古学』有斐閣

村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店

大田区立郷土博物館編 2001『ものづくりの考古学－原始・古代の人々の知恵と工夫－』東京美術

島根県立古代出雲歴史博物館編 2009 企画展図録『輝く出雲ブランド　古代出雲の玉作り』ハーベスト出版

東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房

角田徳幸編 2013『木製品から見た古代のくらし』島根県古代文化センター

こまつ原始・古代のものづくり

発行日　平成 30 年 3 月 23 日

発　行　小松市埋蔵文化財センター

編　集　小松市埋蔵文化財センター

〒 923-0075

石川県小松市原町ト 77-8

TEL 0761-47-5713

印　刷　マルト株式会社

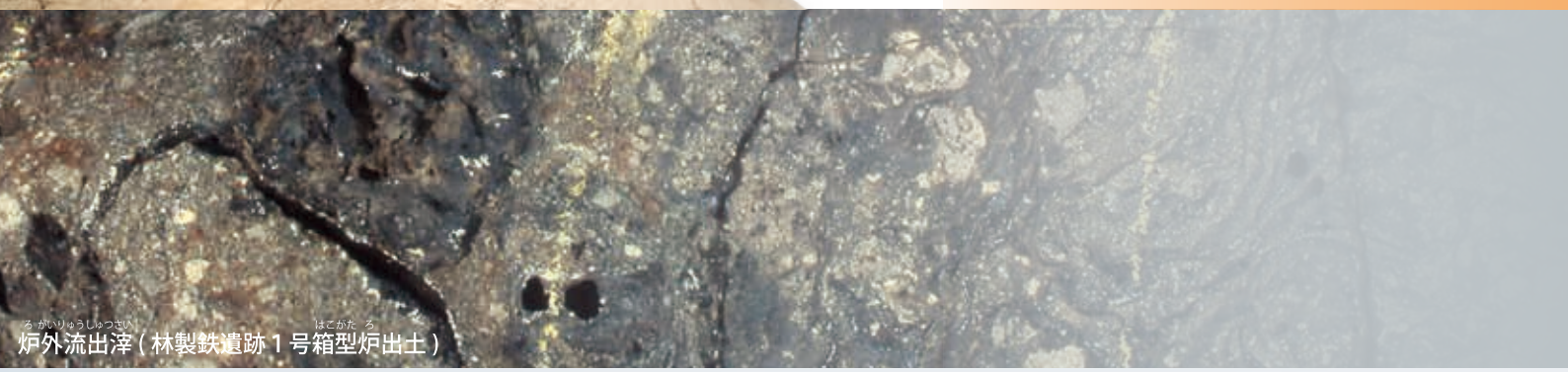
●本冊子は、平成 29 年度「市内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」として文化庁補助金の交付を受けて改訂・増刷しました。

赤瀬町の流紋岩露頭

弥生時代の田舟（八日市地方遺跡出土／材：スギ）

近代の麻布（小松市立博物館所蔵）

飛鳥時代の須恵器大甕（林タカヤマ窯跡出土）



炉外流出滓（林製鉄遺跡１号箱型炉出土）

小松市
埋蔵文化財センター
Komatsu City Archaeological Research Center